



都々逸エレキ冊子

# モダンゴード



## モダンゴード

双葉屋ほいる

君を巣穴に引き込みたくて恋の小路で花を撒く

二つ重なる蛍光灯がめおとのようで嫉妬する

いらぬいらぬいらぬにもいらぬいらぬ あなたがいればそれでいい

種も仕掛けもある訳やないが君の唾液が惚れ薬

どんな甘味を頬張れどなおその秘薬にはかなわない

蜜吐き 毒吐き 首筋すする すべておなじ唇で

消えてしまうから名前を呼んで 杭を刺してよ泥沼に

君のまつげを伸ばして結び ずつとこつちをみてほしい

あいをひとりで受けたいあまり君の飼いださえ憎い

あなたをいのちのよりしろにして 生きるわたしのがらんどろ

着物姿の布地の下に隠す逢瀬の赤い痕

君と眠った寢床に染みた甘い匂いに涙する

言えるわけなし 私を連れて逃げてだなんて絵空事

声も掻き消す吹雪に溶けて死んで逝きたい心ごと

種も仕掛けもある訳やないが君の唾液が惚れ薬  
どんな甘味を頬張れどなおその秘薬にはかなわない  
蜜吐き 毒吐き 首筋すする すべておなじ唇で  
消えてしまうから名前を呼んで 杭を刺してよ泥沼に

## 元動画

【神戸節】モダンゴード【ジャズアレンジ】

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm22601270>

ほいる



君を巢穴に引き込みたくて

恋の小路で花を撒く

スコフフ°





和純

君の唾液が惚れ薬

ある訳やないが

種も仕掛けも

あいをひとりで

受けたいあまり

君の飼いださえ憎い

下弦





声も掻き消す吹雪に溶けて

死んで逝きたい心ごと



うさぎ

東風

消えてしまおうから  
名前を呼んで

杭を刺してよ  
泥沼に





其れは降りしきる合間を縫つて

ルオ

しとど降りゆく氷雨厭うて縮こむ子女と魚尾灯。

馬車道からの嬌声に窺い知れる情景に、店仕舞いをした茶屋の軒先で難を凌いでいた女は息をついた。

既に一刻は過ぎただろう待ちぼうけの身には、寒さがより一層堪える。我知らず身震いをして、視線を滑らせた。

滲んで揺らぐ灯は橋の袂に二つ、比喻でも何でもなく対であるそれらをじっと見つめる様は、精巧な人形を思わせる程に美しく空恐ろしい。

不意に、紅をさした唇が笑みの形を作った。

灯りの下、着物の裾に水が跳ねることにも頓着せず此方へと大股で歩く男がいる。辺りを見回す黒曜の瞳が女を認めると、その歩速はいや増した。

大きな蛇の目傘が差しかけられ、小さく謝意を示す言葉が零れる。

「悪い、遅くなった」

「いいえ。貴方がお約束を守ってくださいさらないのはいつものことですから」

からかうように紡いでみせれば、頭を搔いて言葉を探す風情が漂う。無造作に纏められた濡れ羽色の髪が一房落ちかかり、鬱陶しそうに掻き上げられた。

屋根の影から傘の中へと移った女が払う手伝いをしてやれば、互い違いになるように、僅かばかり湿りけを帯びた小豆色へと手を伸ばされる。

数度軽く頭を叩く、節樽立った手。表面が冷え切っているからこそ、内の熱が僅かに触れるばかりの額を通してでも伝わる。

これで仕舞いとされることも多い仕草ではあるが、今宵は同時に唇が動いた。

「何か欲しいものは？」

お詫び代わりのつもりなのだろう。感情は言葉ではなく行動で示すことの多い人だ。だから考え込む風情を見せて、されどその実、女の胸の内には甘味も簪の類も浮かん



ではない。

いらぬ、とつい意地悪を言ってみたくなる。いらぬ、何もいらぬ。貴方がいれば、それで。

続きはついで言えずじまいで、結局のところ女の口から出るのは、たわいのない言葉。

「最近流行りの氷菓でも」

言った途端、悪戯を叱られた餓鬼大将の如くへの字に曲がった口元に、女は忍び笑う。この時節、しかも宵の入りでは買えないことを知ってのことだ。ささやかな意趣返しである。

幼少のみぎりは少女にも間違われたらう長い睫毛に縁どられた切れ長の瞳も、この表情では形無しだ。それが愉快で堪らない。

「あとで接吻(くちづけ)一つ下さるなら、それで譲歩致しますよ」

軽口を叩いて締める。並んで歩くために僅かばかり近寄れば、腕を取られた。顔を上げ小首を傾げる女に、今度は男がにやり笑う。

「今、誰もいないな」

それが何かという問いかけは無かった。雨を凌ぐ小さな天井が低くなるのは、万に一つも無粋な通行人に見られぬように。

紫煙の匂いが女に近づき、口の中に苦みを与えて離れる。

どんな甘味も勝てぬ唇、刹那か又は数刻か。

は、と女の息が艶を纏って落ちる。二人の間で上がった白が、天へと昇ろうとし、傘に邪魔立てを受ける。柳眉が軽く吊り上げられた。

「あとで、と言ったのに」

「別にいつでもいいだろう」

「冗談のつもりでしたのに。こんなところを見られたら」

言葉を遮るように、とんとんと自身首筋を叩き、男の笑みが深まる。その意図を察して、女は襟元を押さえた。頬に一気に朱が差し込む。

押し問答を続けるのは子供のようで、女は男の肩口を睨んで押し黙った。ふと、視線の先、男の頬に、赤い痕が残っていることに気付く。連鎖するように、嗅ぎ慣れた匂いの中、別のものが主張していることを悟る。

「また、喧嘩でもなさったの？」

「ああ。風呂を嫌がってたな」

くすくすと声に出して笑えば、男はわざとらしく愚痴を零し、追いかかない程度の歩調を選んで半歩先に大路を歩き出す。故に彼女は笑声を選んだ。

——泥棒猫に憤るならばともかく、愛犬に嫉妬など、それこそお笑い草だ。

「気まぐれな子とはお聞きしていたけれど、また我侘放題されたのね」

「ああ」

軽口が精一杯の女を嘲笑うように、平然と駄々をこねる男の至宝。

「それでも、嫌えないのだから難儀なものね」

「ああ」

この関係がいつ終わるかと怯える女を突き放すように、絶対の情を注がれる、家族にも等しい存在。

「羨ましいわ」

どろりとした感情の発露は、只の感想と取られたらどうか、女には最早判別の術がない。

乾いた唇を唾液で湿らせて動かし、話題を流していく。男が朴訥な話し手となり、女



が流暢な聞き手となる対話は、幾度か途切れながらも続く。

次第に外気に呼応して下がっていく体温に、女は息をついた。脇道に飾られる活動写真の煽り文句に目がとまろうと、最早心が波立つことはない。

代わりに降り積もるのは、欲より余程扱いやすく消えにくいものばかりだ。厄介な心の鉛たちは、とうの昔に捨て去ることを諦めた。暫くして、男が水を向ける。

「そちらは？」

ひどく抽象的な問い。しかし女は俯いた。話題など幾らでも選べるだろうに、まるで単刀直入に切り込まれたように逡巡する。返るは、無理に押し出した声。

「そろそろ、身を固めろ、と」

「そうか」

傘に落ちる軽い音だけが周囲に響く。男も女も、まるでト書きに従うように、口を開こうとしなかった。

難儀な恋だと、最初から分かっていた。

身分違いと引き裂かれるような時代は終わったばかりで、親子と揶揄されるほど年が離れているわけではない。

何処をとっても半端な関係は、諸手を挙げて祝福されることはない。

いっそお仕着せの悲劇ならば一緒に逃げてと言えるのにと、女は何度目か知れぬ息をつく。男からの言葉ならば、心中の誘いであっても頷くというのに。

芸事ならば万事そつなくこなす彼の、出来ぬことを並べて笑う。

——そんな相手に惚れたのは、自分だ。

常に不安で、自己に嫌悪と憐憫を代わる代わる向けて、それでも騙されているわけではないことを信じているから、慕っている。

これが愛だろうか、と、近頃異国の物語で頻繁に出て来る言葉に思い当たる。情のほうか、余程馴染みがあるけれども。

女の笑みの種類が変わったことに気づき、男は顔を覗き込む。白魚の手は艶やかに、彼の頬へと添えられた。

「今日はそちらに泊まっても良い？」

渋る男に、軽やかに唄う。

「『積もる話が仰山おすえ それに今夜は』」

言い差した言葉に何事か返そうとして、男はふと傘を傾ける。

溢れた笑みは、空から落ちるものが立てる音の変化に気付かなかった己とその理由を悟った故だろう。

「『雪どすえ』……か」

はらはらと舞う六つの花は、二人が寄り添う大義名分を作るように、先の道を白く染め抜き始めていた。





## 執筆者一覧(ツイッターE)

### 絵



スコラブ (@scope\_scape)



和純 (@kasumivoice)



下弦 (@kagen\_s)



卯鷺 (@SUZUKI\_Lapin)



東風 (@kochi\_192)

### 小説



ルオ (@ruo129)

### 名前札



猫亭屑屋 (@gatonellauto)

### 表紙



ゆかり (@yukari\_rito)

### 編集



小早川 (@dodoitsu)

### 原作



双葉屋ほいる (@hoiru\_utayomii)

都々逸エレキ冊子 モダンゴード

二〇一四年十一月十九日 発行

原作 双葉屋ほいる

編集 小早川

本書の内容についてのご意見・お問い合わせは  
編集者のツイッター([@dodoitsu](https://twitter.com/dodoitsu))にお願いします。